

# リビングを覗くと

人も犬も怪我や病気をしたことで、  
新たに見えてくるものや芽生える感情がある。

## 寄稿



### はつん

フレンチブルドッグ専門「ZAIHOO」代表。フレンチブルドッグの子犬販売を中心に、ドッグウェアやオーナーウェアなども扱うインターネットショップの代表をしています。そのきっかけは、僕自身が初めてフレンチブルドッグの子犬探しをしたときに、理想の子犬が見つかるまでとても苦労したから。ZAIHOOは、その当時の僕がいちばん求めていた「フレンチブルドッグらしいフレンチブルドッグ」との出会いの場所です。

フレンチブルドッグ専門「ZAIHOO(ザイホー)」  
URL: <http://www.zaiho.jp/>  
Mail: [mail@zaiho.jp](mailto:mail@zaiho.jp)  
TEL: 0120-09-3140

リビングを覗くと、3人掛けのソファの真ん中に座ったじいちゃんが、天を仰ぎながらうたた寝している。限りなく悪くなった視力でテレビを見ているから、途中で疲れてしまったんだろう。じいちゃんの隣には、キュービーが寄り添って寝ている。93歳のじいちゃんと9歳のキュービー。世間が、せわしなく、世知辛いとしても、このリビングの世界には関係ない。つけっぱなしのテレビでは、子どもたちが将来の夢について語っていた。

僕はじいちゃんが嫌いだった。95歳で亡くなった今も、とても好きだったとは言えない。じいちゃんは地元では有名な市議会議員だった。8回選挙に出て8回ともすんなり当選。背は高くないが恰幅がよく、スーツがよく似合い、オールバックで力強い眼光、人の数が増えれば増えるほど冴える演説。議員になり、議長になり、消防団長を務め、海外を飛び回り、地元、静岡県富士市のために生きた。虎雄(とらお)と言う名前そのまま、まさに虎の雄のような人。当時、小学生だった僕でもわかるくらいカリスマ性がある人だった。

じいちゃんのカリスマ性は、野獣性と謙虚さで成り立っていた。その2つの振り幅の広さが周りに集まる人を魅了していた。たぶん計算などほばない。生まれ持った天然物のカリスマ性。でもこのカリスマ性には

問題があった。それは家の外ではなく、家の中にあつた。家にカリスマがいると、家族は疲れるのだ。毎日いっしょに生活していると、家族は気の休まるタイミングがない。同じ檻に虎がいるんだからあたりまえだ。

議員を引退したあとも、じいちゃんはカリスマを家に持ち込んだ。自分の考え、自分の都合、自分のタイミングをすべて押し通す。通ればそれがあたりまえ、通らなければあからさまに機嫌が悪くなる。

「キュービーの面倒は俺がみたい」82歳になったじいちゃんが僕に言った。俺にみさせてほしい、ではなく、今日から俺があるから。希望ではなく、結果報告だ。カリスマはいっただって、いくつになつたって、自分の意見がすべてだ。はじめてキュービーがウチに来た日に、こんな変な犬を飼ってどうするんだ、お前はちゃんと面倒みれるのか、俺は一切手伝ったりしないぞ。これ以上ないぐらいの不機嫌な口調で罵詈雑言を並べたじいちゃん。それが1ヶ月もしないうちに、キュービーの表情や行動、キャラクターの可愛さにハマり、キュービーが僕に懐きはじめてのが気に入らなくなり、じいちゃんはキュービーを自分のものにしたくなったのだ。「キュービーの面倒は俺がみたい」どの口でそれを言うんだ、本当はこのカリスマにつっこみたかった。ばあちゃんは、じいちゃんの隣

から僕に申し訳なきような顔を向けていた。

ばあちゃんが亡くなったあとのじいちゃんはとても無口になった。リビングでキュービーと2人、テレビをみて過ごす時間が長くなった。次第に、目、心臓、肝臓、大腸と、歳相応に患いはじめた。薬の副作用で家中を徘徊したり、倒れたり、籠もったり、介護なしではいられなくなつていった。僕、父、父の妹の3人で手分けして介護した。あのカリスマだったじいちゃんが、介護がなければ生きていけなくなった。すると今まで弱音など吐いたことがなかったじいちゃんが、たまに弱音を吐くようになった。そのあたりからだ。もう94歳にもなつて。やっつこだ。やっつかりスマだったじいちゃんが普通のじいちゃんになった。95歳で亡くなるまでの最後の1年。家族に不安を打ち明け、わがままを言い、助けを求めるようになった。病気になるって、介護になつて、はじめて普通のじいちゃんになった。不思議なもので、実際は朝から晩まで手がかかるといって、ほとんど介護が大変になつていく。なのに、普通になつた、素直になつた、本音になつた、そんなじいちゃんが可愛く思えるようになった。今までは嫌いだっ

た。どれだけ世間からの評価が高く、立派な人であるうと、僕はずっと嫌いだ。大人になつてからも何度か歩み寄ろうと思つたけどダメだっ

た。嫌いだった。それなのに、夜中に家中を徘徊し、全裸になり、部屋中に便を撒き散らし、リビングのフロアリングにうっ伏せて熟睡している。そんなじいちゃんをみて、可愛いという感情が芽生えた。一瞬びっくりした。僕の頭がおかしくなつたのかと思つた。可愛い？ なんて？ でもすぐ点と点が繋がった。子犬といっしょだ。子犬を迎えて、ある程度のしつけが入るまでと同じだ。じいちゃんが赤ちゃんと戻つたといふだけだ。子犬のように素直になつたじいちゃんが、手がかるじいちゃん、可愛いと思つた。

僕が初めて迎え入れたフレンチブルドッグ。パイドの女の子で名前はキュービー。漫画の主人公の名前で、とにかく体が頑丈であつてほしいと思ひ、つけた名前だ。名は体をあらわすのか、思いが通じたのか、本当に健康で、頑丈で、男の子としか思えないようなやんちゃな女の子に成長した。そんなキュービーも12歳を越え、さすがに歳相応に患いはじめた。フレンチブルドッグの平均寿命からすると問題が出てきて当たり前だけど、キュービーなら15歳くらいまで健康だろうと希望的観測をもつていた。でも現実には、じいちゃんが亡くなつた頃、11歳を越えたあたりから目や背骨、後ろ足が悪くなりはじめ、12歳になつた今、介護に近い状態で暮らしている。床や壁など、ケガなどしないようにしてあるが、

それでもぶつつかつたり、転んだり、引っくり返つて起き上がれなくなつたりもする。正直とても大変だが、その手がかることがすくく愛おしく思える。じいちゃんのとくと同じだ。

生後2ヶ月のとき、キュービーはウチにやつてきた。白と黒の愛嬌ある毛色をした子犬は、せわしなく家族1人1人の匂いを嗅いで回つた。頑固で、しつけが思うようにならず、何度も将来が不安になつた。何をしても可愛いその表情や行動に、甘やかして育ててしまひ、わがままに成長した。「キュービーの面倒は俺がみたい」じいちゃんがキュービーの主人になれるよう家族が気が使つた。キュービーはじいちゃんはどこに行くにもついて回り、常に寄り添つた。キュービーはじいちゃん以外の家族の言うことを聞かなくなつた。それでもキュービーはいつも家族の中心だった。

今にも転びそうにヨタヨタ歩くキュービーの後姿がとても愛おしい。じいちゃんが亡くなつてからのキュービーは、じいちゃんの定位置だった3人掛けのソファの真ん中で眠るようになった。でも今はもう自分では上れない。それでも寝るときはソファの上に上ろうとするしぐさをする。だから僕はキュービーを抱いてソファの上にあげる。するとキュービーは安心した顔で横になる。僕

はもソファから落ちてでも大丈夫



な状態を整え、テレビを付け、キュービーにおやすみを言う。

僕はじいちゃんが嫌いだった。95歳で亡くなつた今も、とても好きだったとは言えない。でもじいちゃんという1人の男の生き方は僕の中でちゃんと生きていく。そしてじいちゃんがキュービーに愛情を注ぎ続けたことに感謝している。人も犬も怪我や病気をしたことで、新たに覚えてくるものや芽生える感情がある。

じゃあ、もう 獣医さんに  
**ぜんぶ**  
きいちゃおう



● おすすめ獣医さん  
● 月謝平均治療費  
● ペット保険  
● アクサダイレクトプラン70歳貫あり70%  
● 東京都・エヌ(愛)フビをこてつノホワイトアンドクリム2歳♂/17キロ